

□ 各地の音楽活動 ● 北海道

八木幸三

札幌交響楽団は、マックス・ボンマーが1月定期で首席指揮者を勇退し、スイス生まれで多くのオーケストラと関わり、豊富な経験を持つマティアス・バーメルトが就任。4月定期では、広大な自然を交響詩のように描いたR・シュトラウスの「アルプス交響曲」を切れ目なく変容する劇的音楽へと仕上げた。9月定期では、ドビュッシー、フォーレと細川俊夫の「瞑想」を取り上げた。今後、時代や地域を越えた多彩なレパートリーで札幌に新風を送ってくれそうだ。2月定期では、名誉音楽監督尾高忠明が武満作品の初期から晩年にいたる重要な作品を特集。札幌がサウンドトラックを担当した映画「乱」や谷川俊太郎の詩を中井貴恵が朗読した「系図-若い人たちのための音楽詩」などで、武満音楽をじっくりと聴かせた。また、尾高は8月定期で英国作品を特集。エルガーの「チェロ協奏曲」を今井信子がヴィオラ独奏し、清楚であたたかな音色を聴かせた。他にブルックナーの交響曲第3番「ワグナー」を演奏機会のない第2稿版で指揮した高関健（5月定期）、チャイコフスキーの交響曲第6番「悲愴」を緩急自在なパッセージの積み重ねで鮮度の高い音楽に仕上げた飯守泰次郎（6月定期）、さらにベートーヴェンの交響曲第3番「英雄」を明快なタクトで勢いよく推進させた小泉和裕（10月定期）など、各指揮者の個性が光った。今年最後の定期では、ボンマーが再登場。彼の出身地ライプツィヒに関わる作品が並べられ、バッハのピアノ協奏曲第1番ではマルティン・シュタットフェルトが、独特のピアノリズムを聴かせ印象的だった。札幌団員個々での活躍として、コンサートマスターの大平まゆみ、田島高宏がそれぞれのリサイタルを開催。ヴィオラの物部憲一を中心とする室内管弦楽団「ムジカ・アンティカ・サッポロ」は、チェロ奏者で古楽演奏のエキスパートでもある鈴木秀美を迎え、ヴェネチア・バロック音楽の魅力を伝えた。ヴィオラの青木晃一、弦バスの齋藤正樹もそれぞれ個性溢れるリサイタルを開催した。

創設者レナード・バーンスタインが生誕百年を迎えた「パシフィック・ミュージック・フェスティバル（PMF）」は、彼の偉大な業績をあらためて迎えるプログラムとなった。PMFオーケストラ（PMFO）によるオープニング・コンサートと3つのプログラムによるコンサートでは、「キャンディード」序曲をはじめ、交響曲、管弦楽曲など彼の重要作品が次々と演奏された。特にオール・バーンスタインとなったBプロでは、第1回目のPMFでバーンスタイン指揮・ロンドン響と共演した五嶋みどりが28年ぶりに登場。第1回目に演奏した「セレナード（プラトンの『饗宴』による）」で玲瓏なヴァイオリンの音色を聴かせた。さらにAプロでは、バビロン人によるエルサレムの破壊がテーマとなったユダヤ的要素の強い交響曲第1番「エレミア」のフィナーレで、古いヘブライの歌をモチーフとした哀歌をイスラエル出身のメゾソプラノ歌手リナート・シャハムが説得力のある歌唱で聴衆を惹きつけた。またバーンスタインの長女ジェミー・バーンスタインが来札。ピクニックコンサートや教育セミナーで父への思い出を語った。第6代芸術監督として4年目に入るワレリー・ゲルギエフはCプロでPMFOの采配を振るい、バーンスタインが愛したマーラー作品の中から交響曲第7番を演奏。マエストロは楽章ごとの性格を十分に引き出しながら80分に及ぶ大作を一気に聴かせた。近年「PMFの顔」的存在となったライナー・キュッヒルをはじめとする教授陣で編成した「PMFウィーン」や「PMFベルリン」「PMFアメリカ」、さらにPMFOメンバーによる室内楽コンサートは、札幌コンサートホールをはじめとする市内各所、函館

市芸術ホール、奈井江町文化ホールなどを会場に多彩なプログラムで公演。今年で6回目となる音楽教育プログラム「リンクアップ・コンサート」やPMF教授陣が北海道で音楽を学ぶ学生を指導するPMF公開マスタークラスの拡大など、教育音楽祭としての内容がさらに充実された。

今年最大の話題となったのが、北海道初の多面舞台と3層バルコニー形式2,300席を備えた本格的オペラ劇場である札幌文化芸術劇場（愛称：hitaruヒタル）が10月に開館したこと。こけら落とし公演「アイダ」はチケットが即日完売し、その関心の高さを示した。このオペラは全国の3劇場との共同制作ながら、管弦楽が札幌交響楽団、地元音楽家による合唱団が二期会合唱団と共演する編成で、ダブルキャストによる二日公演。指揮を務めたパティステルニは終始覇気のあるタクトで見応え十分な舞台を展開。小樽出身の針生美智子（巫女役）が高い評価を受けた。創立15周年を迎えた在札幌オペラ団体「LCアルモーニカ」は、1月に「おこんじょうり」など林光の2作品を同時公演し、8月には「ホフマン物語」を字幕付原語で全幕上演。同団代表の南出薫をはじめ齊藤みゆきら地元歌手に上本訓久、大塚博章など東京勢が加わり、管弦楽を伴った本格的オペラを提供した。札幌で活動する若手音楽家団体「music Anello」は、「小劇場風に親しみ易く」をコンセプトに「愛の妙薬」を手作り感のあるステージで展開。北海道教育大学・実験劇場は、シリーズ「箱館戦争」の第2弾としてオペラ「土方歳三最後の戦い」を上演。広瀬るみの原作を塚田康弘が台本・演出し、二宮毅が作曲を担当。土方歳三に焦点を当てた地元発信のマドリガーレ・オペラとして仕上げた。さらに、オペラを日常的に広めようと、「オペラファクトリー北海道」が在札幌オペラ団体の枠を越え、喫茶店という小さなスペースで1時間ほどの「カルメン」を上演。高い集客率でオペラファンの拡大を狙った。

9月6日に発生した胆振東部地震は最大震度7を記録し、その後の道内全域停電は音楽界にも大きな影響を与えた。9月8日に開催が予定されていた札幌名曲シリーズの中止をはじめ、道内コンサートホールの休館により多くの公演が中止、または延期となった。元札幌コンサートマスターの市川映子と道内で精力的に活動するピアニスト大平由美子によるデュオ・リサイタルもその一つ。停電による情報不足で公演延期の知らせも滞った。後日行われた公演では、印象派やロマン派など多彩な曲目が落ち着いた雰囲気であられた。

若手演奏家では、1月にソプラノの佐々木アンリ、12月にクラリネットの高橋良輔が新進演奏家育成プロジェクト・リサイタル・シリーズSAPPROに出演。ピアノの藤本志帆が得意のフランス作品とブラームス、クララ・シューマンの作品により自身の曲目解説も含め当夜のコンセプトを明瞭に伝え、浅沼恵輔がグリーグや武満作品で繊細なピアノリズムを、渡部美露がプロコフィエフ、バラキレフ作品、小山雪絵がプーランク作品で迫力のあるピアノを聴かせた。

ベテラン演奏家では、元札幌大谷大教授の吉川順子が深みのあるドイツ歌曲をじっくりと聴かせ、傘寿を迎えた田中則子が高橋節子と共に「R・シュトラウスに憧れた山田耕作」と題し、深遠な歌声を響かせた。夕張出身で永らくイタリアを中心に演奏活動をし、藤原歌劇団にも所属する倉岡陽都美と小樽出身で内外のコンクールを制覇し、オペラでも活躍する小林実佐子がデュオ・リサイタルを開催。倉岡がイタリア・オペラのアリアを、小林は日本歌曲を取り上げ、両者の対照的な個性が伝わった。その他、石田久大、長島剛子、駒ヶ嶺ゆかり、一鐵久美子、大友ひろ世、平野則子、松井亜樹など個性豊かな声楽家によるリサイタルが相次いだ。

札幌コンサートホールの専属オルガニスト、マルタン・グレゴリウスがバッハ、フランクなどのオルガン作品に加え、彼自身の即興演奏などでリサイタルを開催。委嘱作品として在札幌作曲家杉山佳寿子の「水紋」を演奏し、ひとつの音の滴が水面に広がるようにオルガンの音色がホールいっぱい波打った。